

アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館 ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



カミーユ・ピサロ（一八三〇—一九〇三）
「ライ麦畑、グラット＝コックの丘、ポントワーズ」
キャンヴァス、油彩
六〇・三×七三・七cm
一八七七年

パリ近郊に位置するポントワーズ。郊外ののどかな田園風景を、カミーユ・ピサロ（一八三〇—一九〇三）は、色彩の対比や筆触の効果を活かし、伸びやかさの中に華やきを添えて描いた。印象主義の特徴が際立つ優品だが、そこにはまた、日本の浮世絵の影響も見取ることができる。というのも、ピサロは日本美術に対し、一八七〇年代初めから生涯にわたって関心を抱き、例えば広重の浮世絵などにも称賛を寄せた。そしてこれを踏まえてこの作品を観ると、華やかながらもやや抑えられた色調や地平線と丘の稜線の織り成すのびのびとした構図からは、日本の浮世絵が想起されてくるかのようだ。開国間もない日本の美術が西欧にインパクトを与えた時代が、ここにも映し出されている。

（学芸課長 三谷 理華）

No.
128
2017年度 | 冬 |

美術館の堅牢な壁がゆらいでいることについて

館長 木下直之

喜寿にあたる七十七歳でロダンが亡くなってちょうど百年になりま

す。これを記念し、当館では今年（二〇一七年）の秋から冬にかけて、シリーズ「ロダン没後100年に寄せて」を三回にわたって開催しました。

ロダンの彫刻と、ロダンの彫刻を写した写真、現代美術家の作品を対峙させる意欲的な小企画展は十二月十七日で終了しましたが、その先のロダン館に足を運んでくださればいつでもロダンの彫刻にふれることができます。

しかし、古希すなわち七十歳を迎えたロダンに『ロダン第七十回誕生記念号』を捧げた雑誌『白樺』の同人（武者小路実篤、志賀直哉、正親町公和、木下利玄、柳宗悦ら）は、それを編集した明治四十三年（一九一〇）の時点で、有島武郎・壬生馬

兄弟を除いて誰ひとりロダンの彫刻を見ていません。目にするものは、海外から届く美術書や雑誌の不鮮明な複製図版ばかりでした。

ところが、彼らが雑誌とともに浮世絵三十点をロダンに贈ったところ、なんと返礼にロダンから三点の彫刻が贈られてきました。「ある小さき影」、「バリゴロツキの首」、「ロダン夫人の胸像」、いずれも小品ですが、これが日本に上陸した最初のロダン彫刻です。白樺同人の感激ぶりは同誌明治四十五年二月号から生々しく伝わってきます。とりわけ、柳の記事「ロダン彫刻入京記」から、

一枚の葉書が残されています（調布市武者小路実篤記念館蔵）。それは「君も早くロダンを見に来い」と、武者小路、志賀、柳、菅野二十一（郡虎彦）が連名で画家山脇信徳に宛て

たものです。柳の言葉を紹介しましょう。

さつきからワキメもふらずに兎島がみつめてゐる。皆んなもう頭がつかれて来た。（柳）

ずいぶん前、柳宗悦の展覧会（三重県立美術館、一九九七年）でこの葉書をはじめて目にした時、思わず凝視し（葉書をですよ）、彼らはいったい何を見つめていたのだろうと、こちらの頭まで疲れてきたことを思い出します。すぐに三点の小品は赤坂の三会堂という会館（その名は大日本農会、大日本山林会、大日本水産会の三会にちなむ）で公開されました。当時はまだ美術館というものがありません。それから今日までの百年間に、美術館はこの凝視のための空

間をせつせと作り上げてきたのだな、だから美術館は堅牢な壁を持ち、外界と遮断し、沈黙を強いるのだと、痛くなった頭で考えたのでした。美術館の展示室で人が絵や彫刻をじっと見入っている姿を目にするたびに、白樺派の連中を思い出します。

ところが、ここにきて美術館の堅牢な壁がゆらぎはじめたのではないかと思うようになりました。展示室内での写真撮影を許すどころか、推奨する美術館が現れました。「撮った写真をシェアしよう！」（東京国立近代美術館）、「ツイッターやインスタグラムでハッシュタグ「#yokohori」をつけて投稿しよう」（横浜美術館）が最近目にした掲示です。

後者、すなわち横浜トリエンナーレの会場ではすべての展示物の写真撮影が可能で、カメラやスマホを構える人が目につき、明らかに「見る」ことよりも「撮る」ことが優先されていきました。そして、その画像はいつも簡単に壁をすり抜け、シェアされるのです。美術館は凝視の場ではなくなるうとしているようです。

地域×アートの意義

「めぐりアート静岡」に見る、ロダン館の可能性 名倉 達了

静岡大学教育学部助教

静岡市内の文化施設を会場とした「めぐりアート静岡」は、静岡にゆかりのあるアーティストや地域の文化的資源を介して、静岡から芸術を発信する場を創出することを目的に始まり、二〇一七年秋の開催で五回目を迎えました。

近年、国内の地域社会を舞台とするアートの展覧会が数多く開催され、アートに触れる機会が増えています。こうした喜ばしい状況の一方で、内容の差異化など様々な課題が指摘されています。

では、本展の独自性や意義とはなんでしょうか。いくつかの要素から、静岡県立美術館のロダン館でこれまでに展示された三名の作品に焦点を合わせて考えてみたいと思います。

日常に潜む人間の共通感覚をユーモラスに視覚化する鈴木康広は、塩化ビニール製のヒトガタにヘリウムガスを入れて浮遊する作品を展開

し、鈴木基真は映画やインターネット上で目にした建物や木立などをモチーフとして、見えない部分を想像で補った木彫作品を異なる高さとスケールの台座上に構成しました。

二人の作品は、ロダンが生涯を通じて向き合い続けた内的な人間像や彫刻の自立性、あるいは台座との関係といった課題を浮かび上がらせると共に、今を生きる私たちの身体や知覚のありようを軽やかに示しました。

また、今年度の参加者である池島康輔は、大学で修得した西洋彫刻の流れを汲むアカデミックな造形に、活動拠点である浜松市の神社仏閣や山車を彩る彫り物の要素を取り入れた木彫作品を展示しました。強い存在感のなかに細やかな表面性を持つ作品と重厚なロダン作品との対比は、西洋彫刻の流入と近代化のなかで見落とされた我が国の豊かな造形

文化を、静岡の有する文化的資源によって再考するという貴重な提言となりました。

このように、ロダンの作品群と共に現代の立体表現を提示する試みは珍しく、「めぐりアート静岡」独自の取り組みの一つと言えます。そして、西洋彫刻の造形理論の受容だけでなく、我が国の文化における近代化や民主化の発展に影響を与えたロダン作品との対峙は、多くの課題を抱えるグローバル社会で新たな価値を創造する若きアーティストの育成にとって非常に有意義な試みです。

かつて、ロダンという大樹の下には多くの芸術家が集い、世界中に巣立って行きました。更に、優れ

た芸術作品は長い時を経ても、今を生きる人々を受け入れる懐の深さと普遍的なメッセージを内包しています。つまり、充実したコレクションを有するロダン館もまた、人々が集い、静岡から新たな芸術を発信する場の中核となる潜在的な可能性を秘めており、これまで以上に実験的な企画を行って頂くことが望まれます。

最後になりましたが、地域社会においてアートを展開する本質的な意義とは、その地に暮らす人々の生活を文化的な側面から豊かにすることだと言えます。「めぐりアート静岡」が展覧会の独自性以上に、こうした大切な役割を検証し、その一端を担えればと考えています。



池島康輔《月蝕》めぐりアート静岡2017 展示風景



鈴木康広《空気の人》めぐりアート静岡2014 展示風景

アートのなぞなぞ —高橋コレクション展

共振するか反発するか？

2017年12月23日(土)～2018年2月28日(水)

収集を始めたのは、五二歳の時、一九九八年のことで、草間彌生の新作展で《No.27》(一九九七年)など二点を購入したことがきっかけでした。それ以来、現在に至るまで、診療の無い日や空き時間には、現代美術を扱う画廊周りに費やし、気になる作品を買い集めておられます。

みなさんは、高橋氏がコレクションを始めた一九九〇年代という年代を聞いて、どのような記憶が頭に浮かんできますか？社会一般に、一九〇年代はバブル期の余韻を残しながらも、その後続く「失われた十年」と呼ばれる不景気の時代へと本格的に突入した時代でした。当時、

美術の領域では、世代交代が進んでいました。一九六〇年代から発展した日本独自の貸画廊文化が緩やかに衰退を見せ、入れ替わるように都内を中心に現代美術を専門に扱う企画型ギャラリーが次々と誕生しました。展覧会のための展示空間を美術家に貸し出し、その賃料で運営していた貸画廊とは異なり、才能ある若いアーティストを見出し、新作から

なる個展やグループ展で紹介したり、名の知られたベテラン作家の個展を開催して販売をし、作品の売り上げでギャラリーを運営する、いわゆる欧米型のギャラリストが目覚ましく活躍しはじめました。彼らは、国内外のアートフェアに出展して、作品を販売し、日本の現代美術を海外のコレクターや美術館へも広めるとともに、二〇〇〇年代以降に活躍する次世代の若手ギャラリストたちを数多く輩出しました。

現代アートの評価を取り巻く状況も大きく変化しました。例えば、アメリカ人の女性キュレーターのアレクサンドラ・モンローが企画した、草間彌生を回顧する展覧会「Yoko Kusama: A Retrospective」が、ニューヨークのCICAにて開かれたのが一九八九年の事でした。この展覧会より前にも草間の名前はアメリカの美術関係者の間ではそれなりに知られてはいましたが、まさにこの展覧会を契機に一九九〇年代をかけて、草間彌生の欧米での再評価が進んでいきました。この再評価の動き



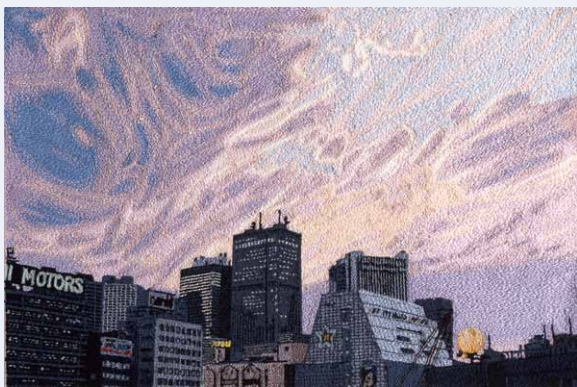
会田誠《大山鰻魚》撮影：木奥恵三
©AIDA Makoto Courtesy of Mizuma Art Gallery 高橋コレクション蔵

は、それまで、欧米男性を中心としたアートワールドにアジア人で女性の、それまではマイノリティと見なされていた立ち位置の作家が、メインストリームの頂点へと徐々に登って行ったことを象徴する出来事でした。現在の草間彌生のグローバルな活躍は、後続する日本人の若いアーティストたち、とりわけ女性のアーティストたちへの道を開きました。

一方、日本の美術館は、当時どのような状況だったのでしょうか。当館を例にとると、一九八六年に本館が開館、一九九四年にロダン館が開館しています。現代美術作品の収集



西尾康之《素粒の籠》
Courtesy of YAMAMOTO GENDAI 高橋コレクション蔵



青山悟《夕暮れの新宿》
photo by Kei Miyajima ©AOYAMA Satoru Courtesy of Mizuma Art Gallery 高橋コレクション蔵

については、二〇〇一年頃までは、当館現代コレクションの基盤となる優れた現代作品の購入が継続的に行われていましたが、二〇〇〇年初頭からは、予算削減のあおりを受け、購入が滞っていきます。この状況は、当館に限らず、他の公立美術館も同様で、二〇〇〇年以降、大半の公立美術館が、現代作家の作品を収集することに予算を割けない時代に突入していきました。

高橋氏はギャラリーの世代交代、日本人作家の国際的評価の高まり、

女性作家の飛躍、そして美術館の購入予算大幅減少という時代を背景に、他に類を見ない独自の日本現代美術コレクションを形作って行きました。高橋氏を本格的な収集へと向かわせたきっかけが、草間彌生の作品であり、若手ギャラリストから寄せられる情報は作品購入の判断材料となり、コレクションした作家の何人かは、当時は若手、今では海外の美術館にも収蔵されるような有力なアーティストへと見事に成長してきました。実力のある女性アーティ

ストの作品が多く含まれている点も、高橋コレクションの特徴のひとつと言えるでしょう。現在では、国内外の美術館や国際展のキュレーターから、出品の依頼が数多く寄せられています。

これまでに、他館で開催されてきた高橋コレクションを紹介する展覧会では、作家ごとに作品を紹介するというスタイルを取っていますが、本展では、「いないいないばあ」、「おとなごども」、「なぞらえ」という三つのなぞのキーワードを設けて、高橋コレクションの魅力を浮かび上がらせます。高橋氏が本格的な収集を始めて四半世紀近くが経過し、購入した当時は、発表されたばかりの新作であった作品も、少し距離を置いて見ることができるようになってきました。展覧会では作家の意図や、作品が持つ性質を分析し、日本の伝統的な絵画との共通点を探りながら、テーマごとに紹介します。ちなみに展覧会を構成するこの三つの言葉は、高橋氏が近著『現代アートコレクター』講談社現代新書（二〇一

六年）の中で論じる、「不在の美」「ネオテニー」、「ミラーニューロン」というテーマを、本展覧会向けに高橋氏に言い換えていただいたもので、展覧会タイトル「アートのなぞなぞ」も、高橋氏の命名に依るものです。

企画にあたっては、三つの言葉を、展覧会を構成する三つの章のタイトルに充て、高橋氏から出された、なぞなぞに答えるような気持ちで、各章のテーマに合う高橋コレクションの作品をセレクトしました。さらに、この展覧会では、出展する高橋コレクションの作品に通じ合う静岡県立美術館のコレクション約三十点を、同一空間に並べて展示します。三つのなぞの答えが何を意味するかについては、ぜひ展覧会場で、作品をご覧になりながら、皆様にも考えていただくとして、ご観覧される際には、組み合わせで並べた作品同士が、どのような関係を結ぶか、ご自身の感性で感じていただきたながら、展覧会を楽しんでいただければ幸いです。

（上席学芸員 川谷承子）

地域の美術館としてのあり様を探る

上席学芸員 川谷承子

ロダンと現代作品

今年で五回目となる「めぐるりアート静岡」が、三週間の会期を終えて、閉幕した。週末の度に台風に見舞われたが、会場に足を運んで展示をご覧になった方から寄せられたアンケートの回答や、直接耳に届いたご意見などからは、展示への手応えを感じている。毎年楽しみにしてくださっているリピーターの方も、少しずつではあるが育っているようだ。この展覧会は、静岡市、静岡市文化振興財団、静岡市美術館、静岡大学、静岡県立美術館とが連携して行っており、市内の

文化施設を会場にして、主に静岡ゆかりの現代作家の作品を紹介している。当館で展示を行う作家は、担当の学芸員が日頃の調査や、ネットワークから得た情報を基に、作品の力、展覧会歴や受賞歴などの客観的指標、地域との関わりを考慮して選び、同展のキュレーションチームで協議の上、決定することになっている。今年の県立美術館会場では、浜松在住の彫刻家、池島康輔を選び、エントランスと、ロダン館に、木彫七点を展示した。

ロダン館は、本来、オーギュスト・ロダンの作品を常設で展示するスペースとして設計されており、現代作家の個展を行う空間としては作られていない。しかしながら、歴代の学芸員が企画して、これまで何人かの作家がロダン館で作品展示を試みて来た。はじめてロダン館で現代作家の展示を行ったのは、ロダン館開館から八年経った二〇〇二年に、元当館学芸員、李美那が担当した「今、ここにある風景」コレクション＋アーティスト＋あなた」展である。彫刻家の菱山裕子が、アルミニウムと、ステンレスステールを素材にした人体や動物彫刻を、ロダン作品や、空間と対話をするように展示した。ロダン作品へのユーモアを感じさせる大胆なアプローチは、鑑賞者を楽しませ、地元新聞に大きく取り上げられ話題になった。二〇〇九年には、元当館学芸員の堀切正人が担当した「静岡の美術Ⅸ 柳澤紀子展 水邊の庭」展で、

美術家の柳澤紀子が、静岡ゆかりの作家としてはじめてロダン館に、身体をテーマにしたミクストメディアの大型作品を、点在させた。ロダンが表現する人体と、柳澤が描いた黒い肌の身体が呼応する、絶妙な展示であった。

筆者は、二〇一一年に「小谷元彦展 幽体の知覚」において、初めてロダン館の展示に関わった。この展覧会では、小谷元彦《SP4：ザ・スペクター——全ての人の脳内で徘徊するもの》（二〇〇九年）を、《地獄の門》の前に設置した。日本近代彫刻の父と呼ばれるロダンの代表作《地獄の門》に、皇居外苑の《楠正成像》をモチーフにした、屍のような騎馬像が挑む様子は、近代彫刻の歴史を亡霊のように背負った、現代作家自身のように見え、他の巡回会場では実現できなかった、ここ唯一の展示に仕上がった。

二〇一三年に「めぐるりアート静岡」がはじまってからは、三人の作家が、このロダン館で展示を行ってきた。毎回、出品作家と一緒に館内を一通り歩き、最もふさわしい展示場所を、作家の考えと美術館の意向を摺合せながら決めていく。これまでにロダン館で展示を行った鈴木康広、鈴木基真、池島康輔の三人は、自らこの空間で展示することを希望し、筆者は、彼ら表現者たちの眼差しを通して、ロダン館の可能性を再発見した。過去の展示を振り返ると、この空間で展示することが、ロダン作品の再解釈につな



「小谷元彦展 幽体の知覚」展 ロダン館での展示風景 2011年 静岡県立美術館 小谷元彦《SP4：ザ・スペクター——全ての人の脳内で徘徊するもの》2009年 撮影 木奥恵三

がっている、または、彫刻というメディアへの批評になっている時、成功した展示になっていたと思う。

静岡ゆかりの現代作家紹介

水戸美術館のクリテリウム、愛知県美術館のAPMoA Project、ARCH（アーチ）、東京オペラシティアートギャラリーのProject Z（プロジェクトエヌ）、静岡市美術館のShizubi Projectなど、若手作家育成や、現代の美術の在り様を紹介する目的で小企画を設けている美術館がある一方で、当館の現行の展覧会事業の中では、現代作家を、スポット的に紹介するという事業枠がない。企画展示室を使って、数年に一度、国内外で高い評価を受け、第一線で活躍している現

代作家の個展を開催する事はあっても、これからの活躍が期待される静岡ゆかりの若手現代作家となると、その機会は得にくい。当館で静岡ゆかりの現代作家を紹介した展覧会としては、元当館学芸員、立花義彰が担当した、「小企画展 県内美術の現況展Ⅰ（油彩・水彩・版画）」（一九八八年）、「県内美術の現況展Ⅱ（日本画・工芸・彫刻）」（一九九〇年）がある。出品作家は、学芸員の日頃の調査によって選ばれた県内在住の昭和世代の作家で、ベテランから若手まで幅広く、Ⅰは五十五名、Ⅱは四十三名から成っていた。小企画展と謳ってはいるが、二階の展示室を会場にした有料の企画展であった。当時、五十二歳の作家、鈴木慶則の一九六八年制作の作品《梱包されたオダリスク》は、学芸員が、同展を機に調査、交渉の末、出品された作品で、展覧会から三年後の一九九一年には購入作品として当館コレクションに加わっている。それから二十五年の間に、学芸員の世代は交代したが、その間に、グループ「幻触」の再評価の機運が高まり、二〇一三年には回顧展「グループ『幻触』と石子順造展」（二〇一三年）を開催する運びとなった。地域の美術館学芸員が関わって、地域ゆかりの作家、作品の掘り起し、展示、収集、展覧会開催へとつなげ、作家の再評価の一端を担ったことは、理想的な展開であったと考える。

「県内美術の現況展」以降、静岡の現代

作家を紹介する展覧会は途絶え、二〇〇三年、二〇〇五年に、堀切正人が担当した「静岡New Art」展まで、開かれていない。「静岡New Art」展では、作家の半分に静岡ゆかりの作家を選び、二階の展示室を外した館内の、オープンスペース（入場料がかからない場所）で、展示を行っている。メディアと組んだ大量動員型の展覧会制度そのものへの批判的な姿勢とも取れるが、地域に根差した美術館としての在り様を探り、静岡ゆかりの若手作家に目を向けた点でも、意義のある展覧会であった。余談ではあるが、浜松出身の作家、高橋唐子のロダン体操は、この展覧会を機に生れている。

地域との関わりの中で

二〇一三年三月、静岡県立美術館が中心となって、静岡ゆかりの現代作家を紹介する「むすびじゅつ」を開催した。これは一般財団法人地域創造が主催した全国公立美術館の職員を対象にした研修会のプログラムとして、市内六つの文化施設を会場に実験的に行った小企画展であ



芸術批評誌「DARA DA MONDE」創刊号表紙（オルタナティブスペース・スノドカフェ、2012年1月発行）

った。同展開催の契機となったのは、芸術批評誌「DARA DA MONDE」創刊号（二〇一二年）での座談会「静岡から芸術を発信すること」であった。同誌を発行する市内オルタナティブスペース・スノドカフェの柚木康裕氏の呼び掛けにより集った文化施設のスタッフが、静岡から芸術を発信させることとその可能性、地方で芸術活動を続けることの魅力や難しさ、分断されている活動ジャンルを交差させることについて、議論した。この座談会、「むすびじゅつ」が発展して、現在開催する「めぐるりアート静岡」へとつながって行った。

あらためて美術館の役割とは

コレクションの調査研究、第一線で活躍する現代作家の紹介と並行して、地域ゆかりの作家の活動にも目を向け、後押しをし、検証していく事が、この美術館の底力となっていくと考えている。「県内美術の現況展」から「めぐるりアート静岡」へと、時代が求める現代美術展の在り方は変化している。あらかじめ用意された枠はなくても、契機を得て、場を創出していくことが重要である。これまでに熱意を持って、場を切り開いてくれた歴代の学芸員と作家に感謝するとともに、これからも彼らの意志を継いでいく術を探り続けていきたい。

※人名には敬称を省略させていただきました。

（上席学芸員 川谷承子）



本の窓

港千尋 著

『新編 第三の眼』

デジタル時代の想像力』

せりか書房 二〇〇九年

今ではパソコンやスマートフォンが一般化して、ネット上の写真を見たり、あるいは自分でSNSに写真をアップロードしたりされている方も多いと思います。写真撮影では今やフィルムのほうが珍しく、イメージはデジタルデータとして保存されます。

本書は、デジタル・イメージに留まらず、写真をはじめ広い意味でのイメージ、あるいは記憶や認識について、示唆に富んだ内容となっています。いわゆるデジタル写真以外にも、オーストラリアのドリーミングの絵、迷路のような模様が施されたパナマのモラという布、盲目の人が装着して人工的な視覚を得る装置など、興味を引く事例が挙げられています。私たちの現在の経験について考えさせてくれる一冊です。

（主任学芸員 植松篤）

静岡から奈良へ

七月一日に奈良の大和文華館という、古美術のコレクションと展示室一つを備えた私立美術館に移りました。近畿日本鉄道會長の志により、十四年間に及ぶ設立準備を経て一九六〇年に開館した館です。展覧会は収蔵品展中心。来館者はご高齢の固定ファンが多く、いまだき稀な長文の作品解説をもものともせず、ゆったりと静かな時間を楽しんでいます。

そうした環境に身を置いて振り返れば、静岡県立美術館が、たいへん複雑な業務を担う機関であったことがわかります。収蔵品を護り伝えることに加え、幅広いジャンルの展覧会を開催し、幅広い世代を対象に普及事業を継続するのは、県民の多様なニーズに応えようとする公立館の姿勢ですが、容易なことではありません。そこで学芸、総務、現場スタッフ、文化政策課の皆さんに助けられながら三年余り勤務したことは、貴重な経験となりました。心より御礼申し上げます。

静岡を離れて懐かしく思い出されるのは富士山です。冬の朝、白磁のように輝く霊峰の姿には圧倒的な迫力がありました。関西に居を移してからは、琵琶湖畔の近江富士や、富士と同じ修験の霊峰立山へ遊びに行きました。立山には螺旋構造の立山博物館

大和文華館学芸部長 泉 万里

館のほか、大型シアターやジオラマ館もあり、テーマパークのようでした。悪天候で人影は疎らでしたが。

懐かしいのは富士山ばかりではありません。新幹線に乗って静岡あたりになると、丘陵斜面にロダン館を探し、なぜか呼吸をとめてくいているように見つめてしまいます。視界からドーム状の屋根が消えてから、ようやくひと息をつき、つくづく思います。静岡県立美術館は、これからもずっと私にとって特別な場所であり続けるのだと。



立山博物館にて

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)
休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)

アクセス

- ◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡I.C.、清水I.C.から約25分
- ◎新東名高速道路 新静岡I.C.から約25分

テレフォン・サービス：054-262-3737
ウェブサイト：<http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>

無料託児サービス
毎週日曜日および祝日10:30～15:30
対象 6ヶ月～小学校就学前

※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



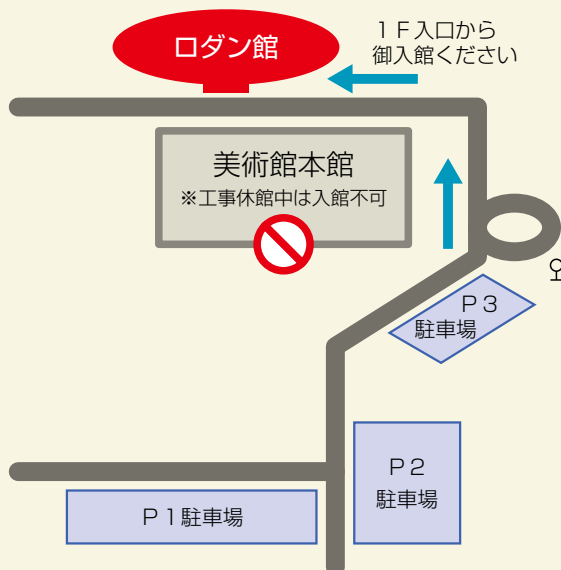
静岡県立美術館
Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

お知らせ

平成30年3月1日(木)から7月上旬まで(予定) 県立美術館本館は改修のため休館となります。

なお、ロダン館に限り本館休館中も開館しておりますので、期間中に御来館される方は下図のとおり本館右手から奥にお進みいただきロダン館1Fから御入館ください。



友の会のご案内 入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。